

札内川懇談会 中間とりまとめ



平成 25 年 3 月

目次

1	札内川の流域の様子	1
1.1	特有の景観	1
1.2	流域の観光資源	3
1.3	清流札内川	6
1.4	札内川の水利用	7
1.5	札内川と住民のふれあい	9
1.6	治水事業	10
2	河川的环境	11
2.1	札内川の自然史	11
2.2	札内川の自然環境	14
3	札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア	20
3.1	自然環境と治水	21
3.2	教育・体験・文化	23
3.3	利用・観光	24

札内川懇談会

札内川懇談会は、札内川について語り、「札内川」や「札内川らしさ」を活かし、地域の活性化、河川文化の継承等につなげることを目的に平成 24 年 2 月に設置されている会です。

札内川の川づくりに向けて、さまざまな形で札内川に関わりを持つ方々と河川管理者が、それぞれの思いを語り合い、札内川らしさをよりよい形で将来につなげ、地域のために活かすこと等について意見交換を行い、この中間とりまとめを作成しました。

今後もさらに具体的な成果や活動に結びつけられるよう、懇談会を継続していきます。

1 札内川の流域の様子

1.1 特有の景観

1.1.1 日高山脈・礫河原・ケショウヤナギ林

- ◆ 札内川は、日高山脈をバックに、ケショウヤナギなどの河畔林の間に広がる礫河原を流れ、雄大で特有の景観を有しています。

日高山脈の山間部から流れ出した札内川の水は扇状地を流れ下ります。川の水は、日高山脈が風化することでできる石礫を、古くからくりかえし運搬、堆積して、特有の礫河原を形成しています。流れは礫河原の中で何本かに分かれて網の目のような流れを作り出します。

また、札内川は、ケショウヤナギの宝庫でもあり、群落が多く見られます。ケショウヤナギは氷期の遺存種ともいわれ、種子の定着と初期成長に礫河原を必要とします。



上札内橋付近



上札内橋付近

1.1.2 時に姿を消す札内川

- ◆ 札内川の流れは時に姿を消します。「札内」の語源は、アイヌ語の「サッナイ（乾く川）」※1です。※1 参考：「十勝川の川舟文化史 澤標」

扇状地河川である札内川の水は、表面を流れるだけでなく、古くから堆積した礫などの扇状地堆積物（さらには湿原や海の時代の堆積物）の間に広く深く浸透し伏流します。少雨・渇水期には、ところどころで河川水が完全に伏流し、表流水が見えなくなる場合があります。

「札内」の語源は、アイヌ語の「サッナイ(サッ・ナイ＝乾く・川)」※2であり、こうした状況から名付けられたのかも知れません。 ※2 参考：「十勝川の川舟文化史 澤標」



礫河原の中を流れる札内川(上札内橋付近)



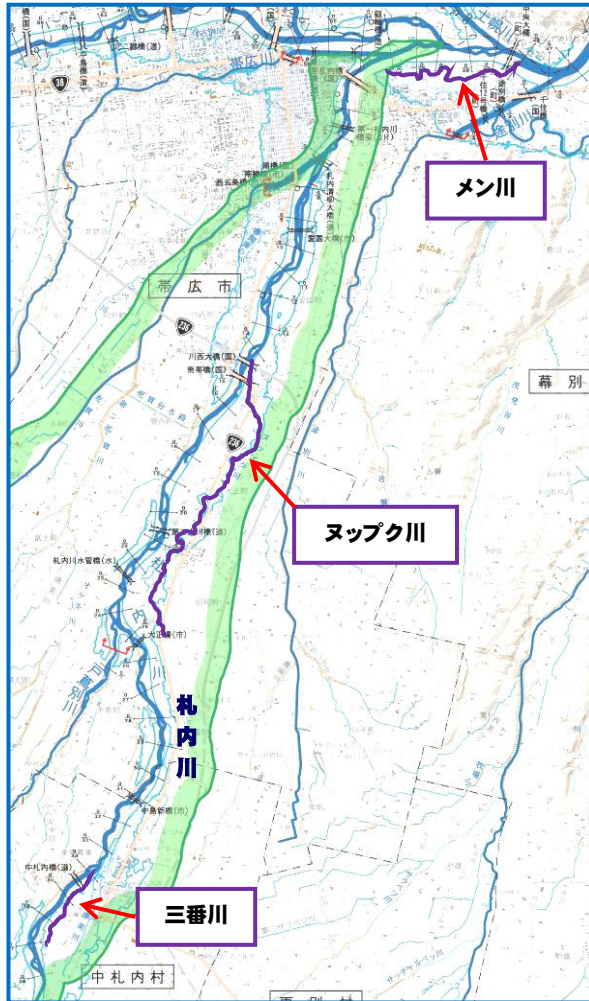
流れが姿を消した札内川(上札内橋付近)

1. 札内川の流域の様子

1.1.3 伏流水由来の流れ

- ◆ 札内川周辺には、伏流水の湧き水による流れがあり、札内川などに支流として合流することもあります。

伏流水が湧き出すことでできる流れは礫の間で浄化されるためか清流が多く、三番川は公園内を流れて人をいやし、メン川ではふ化場で育てられたサケ稚魚の放流が行われています。



ヌップク川でもかつてはサケ稚魚の放流が行われていた



写真: アークコーポレーション(株)

札内川の伏流水が十勝川に流れこむメン川



ヌップク川で遊ぶ子どもたち



写真出典: 中札内村HP

六花の森を流れる三番川

1.1.4 冷え込みによる幻想的な光景

十勝地方の厳しい寒さにより、冬の札内川は凍りつき、また「けあらし」を上げ、河岸の樹木に霧氷の花を咲かせます。

中札内村で実施されるフォトコンテストでは、冬の札内川がテーマとしてよく取り上げられるといいます。



上札内橋付近の凍りついた札内川



霧氷で飾られた河畔林

1.2 流域の観光資源

1.2.1 北海道ガーデン街道

旭川～富良野～十勝の庭園を結ぶ「北海道ガーデン街道」の7庭園のうち、札内川沿川には真鍋庭園と六花の森があり、札内川流域には紫竹ガーデン、途別川沿川には十勝ヒルズがあります。



真鍋庭園



六花の森



紫竹ガーデン



十勝ヒルズ

すべての写真の出典：北海道ガーデン街道 HP

1.2.2 山岳河川の名所

札内川のピョウタンの滝(札内川園地)と札内川ダム、岩内川の岩内仙峡など、山岳河川や渓谷も大きな観光資源となっています。



ピョウタンの滝



ピョウタンの滝近くにあるレストランびよろ



秋の札内川ダム



岩内仙峡

1. 札内川の流域の様子

1.2.3 観光農園・道の駅・十勝川温泉

八千代牧場では畜産加工品の販売店やレストランがあり、ピータン農園ではイチゴ狩りができます。道の駅なかさつないは集客の良さを見せ、十勝川との合流点下流には十勝川温泉があります。



八千代牧場



十勝川温泉



ピータン農園



道の駅なかさつない

1.2.4 体験・滞在型の観光

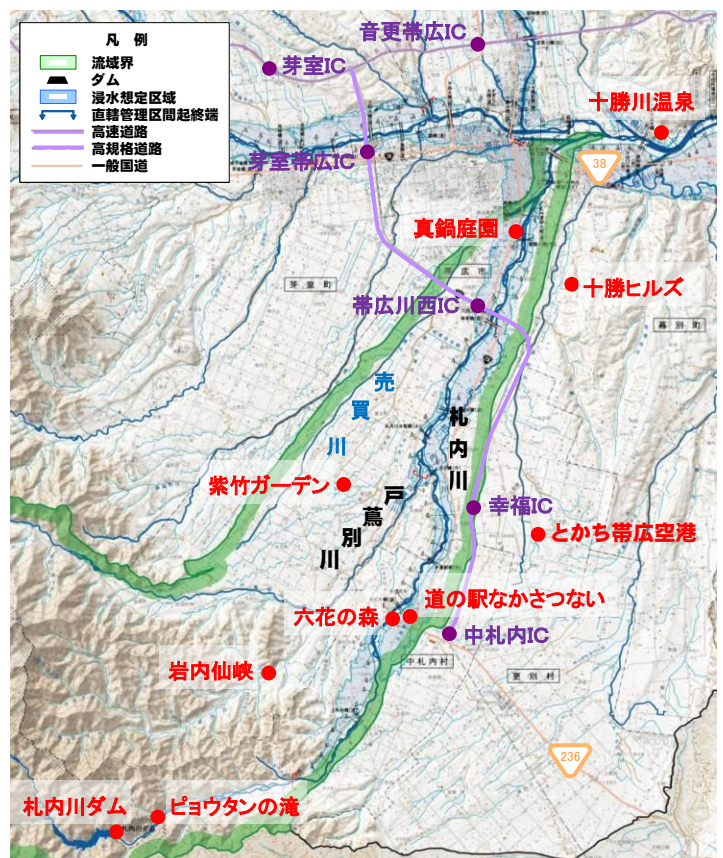
「わが(中札内)村は、農業が地域に根付き素晴らしい農村景観が維持されています。

日高山脈の雄大な景観、清流日本一の札内川、基盤の目に整備された防風林等です。

又、『花の村』の取組みや、六花亭の美術館、田中義剛の花畑牧場、日本唯一の無殺菌牛乳ありで、みどころもたくさんあります。

現在、住民会議は、様々な角度から、資源の活用、人材の活用を検討し、体験メニュー作りを進めています。」

※文：北海道HPの「中札内村グリーンツーリズム推進住民会議」の紹介より引用



1.2.5 札内川流域の観光資源とアクセス

近年、流域内の豊かな観光資源、帯広・広尾自動車道やとち帯広空港への良好なアクセス等により、グリーンツーリズム等の体験・滞在型観光が盛んになってきました。

コラム 中札内村と札内川

日高山脈・札内岳を源とする札内川は、中札内村の中央部を縦断し、開拓以来苦難を共にし、歴史を重ねてきた。

村歌にも「札内川の たゆみなく …」とうたわれている。

過去8度、国土交通省の水質調査で清流日本一となった。

ケショウヤナギの群生は国内最大級である。

中札内村は札内川の恩恵を受け、成り立っていると言っても過言ではない。

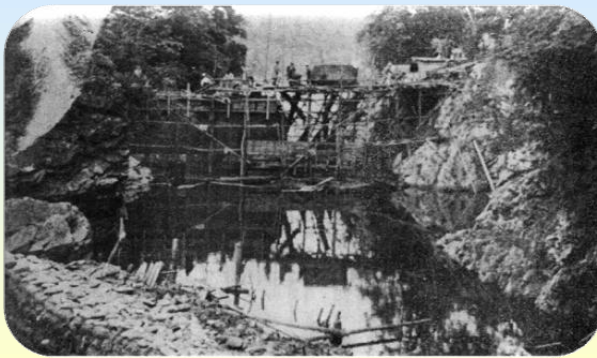
(中札内村)



札内川の水で潤される畑



初冬に赤い若枝が美しいケショウヤナギ河畔林



建設中の農協発電ダム。S29年発電開始(写真出典:中札内村史)



農協発電ダムがS30年の洪水で埋まってきたピョウタンの滝



洪水で倒壊・流出した上札内橋(S37)

1.3 清流札内川

1.3.1 河川とのふれあい

札内川は十勝の河川の中でも透明度が高く、下流部でも清流のイメージがあります。子どもからおとなまで多くの住民が涼を求めて水辺に訪れ、川の体験学習の場としてもよく利用されます。



愛国大橋上流



光南地区 子どもの水辺

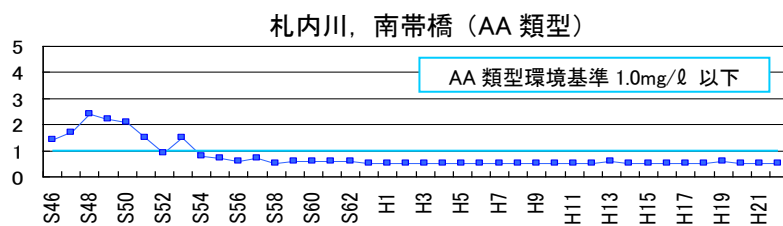
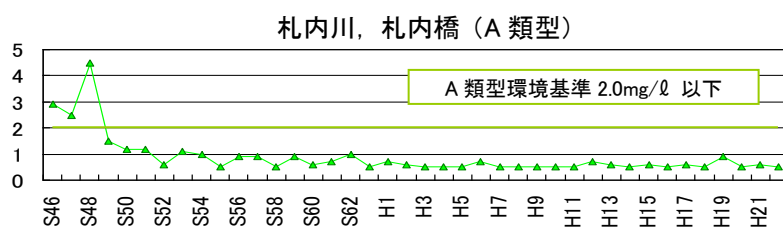


中島新橋下流

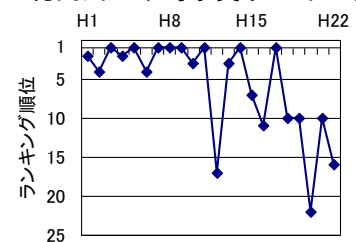
1.3.2 水質

札内川は、国土交通省が全国の一級河川を対象に実施している平均水質ランキングにおいて、過去 8 回清流日本一となっています。

ただ、平成 18 年以降、10 位以下が続いており、清流を守るためには地域全体での取り組みが必要だといえます。



札内川の平均水質ランキング



札内川の伏流水が原水の水道水を「おびひろ極上水」として商品化

1.4 札内川の水利用

1.4.1 上水道水への利用

昭和 28 年から現在の愛国大橋付近で伏流水が取水され、また、札内川ダムを水瓶としてピョウタンの滝下流数キロの表流水が取水され(平成 7 年から)^{※1}、7 市町村^{※2}に供給されています。

※1：札内川ダム竣工は H10 年だが、取水はそれ以前から始まった
 ※2：中札内村、更別村、帯広市、芽室町、幕別町、音更町、池田町



札内川上流部（表流水）



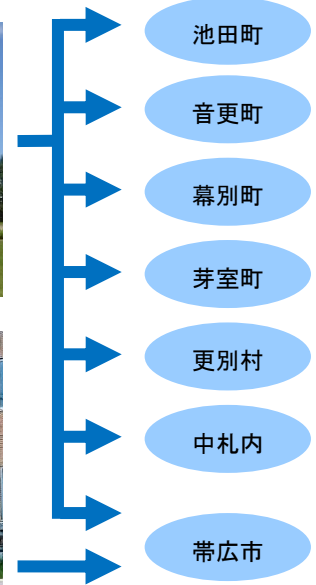
愛国大橋付近（伏流水）



なかとかち浄水場(ワックアプラザ:上札内)

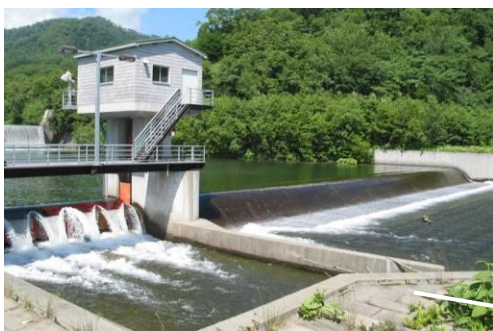


稲田浄水場



1.4.2 農業用水への利用

札内川ダムの下流にある札内川頭首工において取水された水は、中札内村・更別村・幕別町・帯広市にまたがる 1 万 9 千 ha の農地をうるおしています。



札内川頭首工（取水）



給水施設での給水



スプリンクラーによる畑への散水

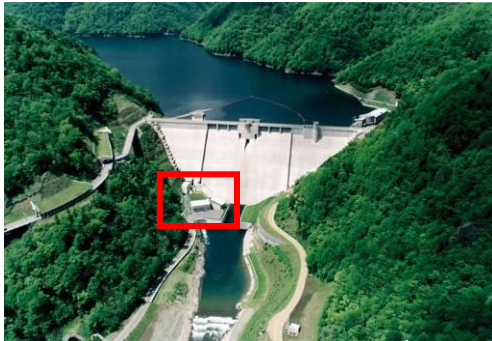


トラクターによる散水や防除

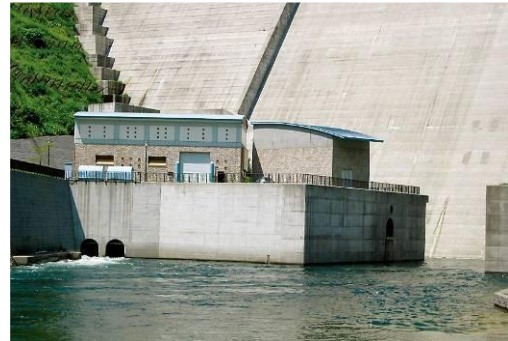
1. 札内川の流域の様子

1.4.3 発電用水への利用

札内川ダムの直下には、札内川発電所があります(電源開発管理)。最大出力は 8,000kW で、平成 9 年から運転を開始しています。



札内川ダム

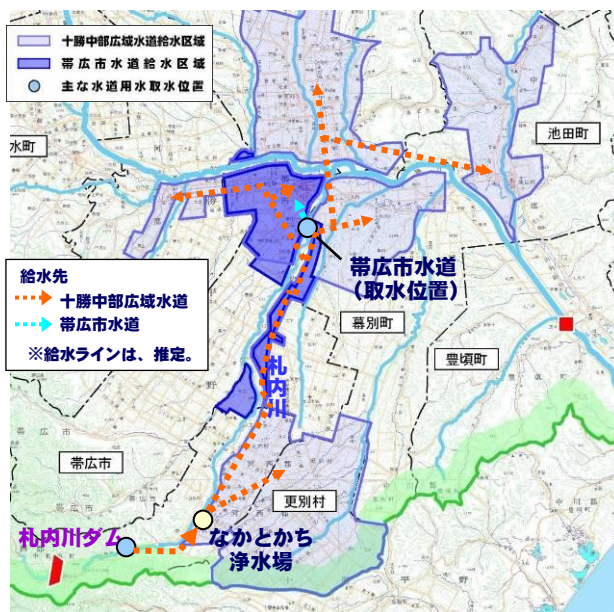


札内川発電所

1.4.4 水利用のまとめ

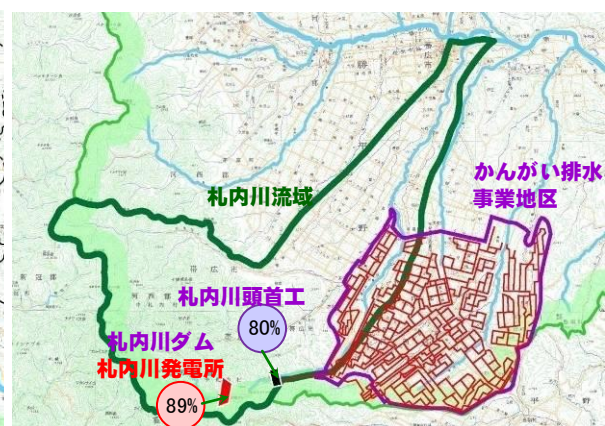
十勝川流域の水道用水の取水割合は河川水が約 6 割であり、その 8 割が札内川から取水されています。

また、札内川流域全体におけるかんがい用水の約 8 割が、札内川頭首工から取水されており、さらに、札内川流域全体における発電用水の 89% が札内川ダムから取水されています(残りは戸蔭別川)。



主な水道用水取水位置と給水区域図

※帯広市上下水道ホームページ等を参考に作成



国営かんがい排水事業地区と札内川発電所

※丸記号の数字は、札内川全体の用途別水利権量に占める割合を表す。発電用水利権量の残りは戸蔭別川の川西発電所

1.5 札内川と住民のふれあい

1.5.1 川狩り

札内川は、「川狩り」に象徴されるように、流域の住民にとって愛着あるかけがえのない水辺として親しまれてきました。



「川狩り」



河原でままごと（保育所の散歩）

（光南地区子どもの水辺）

1.5.2 水辺の体験活動

十勝は河川を利用した住民活動が盛んで、全道 34 箇所ある「子どもの水辺※」のうち、その 1/3 である 12 ヲ所が十勝圏に集中しています。札内川には、光南地区・大正地区の 2 ヲ所に子どもの水辺があります。

※子どもの水辺：子どもたちの河川利用の促進と地域における子どもたちの体験活動の充実を図るもので、文部科学省・国土交通省・環境省の3省が連携する事業



光南地区 子どもの水辺



大正地区 子どもの水辺

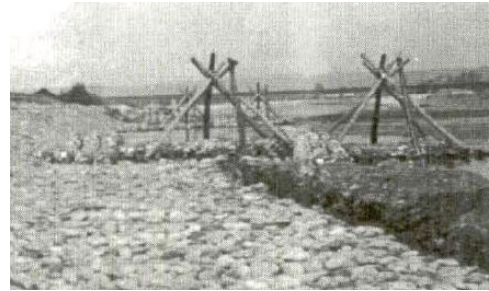
1.6 治水事業

1.6.1 堤防整備、水制工

- ◆ 昭和 23 年に帯広市街地周辺から本格的な堤防整備に着手し、昭和 40 年代には堤防がほぼ連続しました。
- ◆ 急流河川である札内川は、土砂の移動が激しく、蛇行流による水衝部の変化が顕著だったため、昭和 20 年代から河道を安定させるための水制工を実施してきました。



昭和 36 年当時の堤防工事（札内川）



昭和 23 年当時の水制（札内川）

1.6.2 砂防事業、札内川ダム

- ◆ 札内川は土砂の生産が活発で、土砂災害が相次いで発生していたため、昭和 30 年代より砂防えん堤等の整備が行われました。
- ◆ 昭和 60 年には、治水安全度の向上、高まる水需要に対応した水資源の開発を図るため、札内川ダムの建設に着手し、平成 10 年に供用を開始しました。



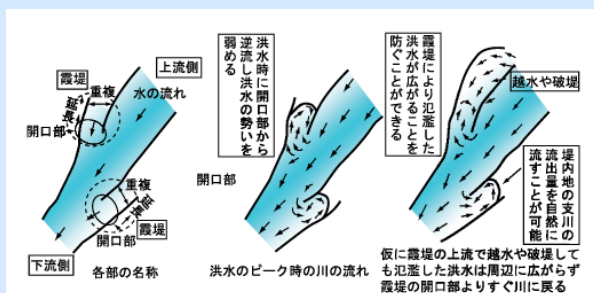
札内川 12 号砂防えん堤（S61 年竣工）

コラム かすみ堤（霞堤）

札内川にはかすみ堤といって、支川合流部において下流の堤防を上流の堤防の堤内側に重ねる形に配置することで、堤防に開口部を設けた箇所が 8 ヶ所あります。

かすみ堤の一般的なはたらきは次のようなものです。

- ・ 洪水時に開口部から逆流し洪水の勢いを弱める
- ・ 氾濫した洪水が広がることをかすみ堤により防ぐ
- ・ 堤内地の支川の流出量を自然に流すことが可能となる



※出典：国土交通省中国地方整備局 HP



2 河川の環境

2.1 札内川の自然史

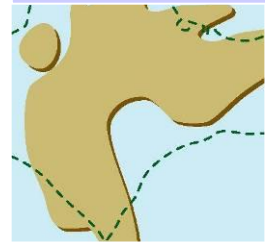
2.1.1 十勝が海の時代から湿原の時代へ

1,000 万年前頃から日高山脈が形成され、一方十勝平野は沈降し海となっていました。500 万年前頃には白糠丘陵が隆起し、十勝平野は内湾へと変わりました。

200 万年前頃には豊頃丘陵が隆起し、150 万年前にかけて内湾は西へずれていきます。内湾は湿原化していき、90 万年前頃には十勝三股から火砕流が盆地の2/3を埋め尽くしました。80 万年前の海進を最後に湿原は陸地化していきました。

参考・図の出典:2012 自然観察会 札内川の勉強会 フィールドワーク

海の時代



1,000 万～800 万年前ころ

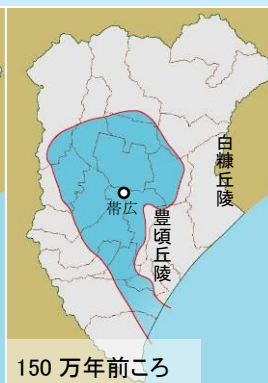
内湾の時代



500 万年前ころ



200 万年前ころ



150 万年前ころ

湿原の時代



80 万年前ころ

図の出典：時をこえて十勝の川を旅しよう！

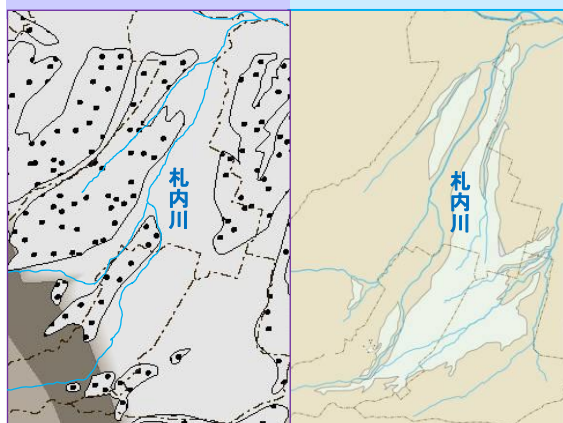
2.1.2 古い礫層と段丘、新しい礫層と段丘

40 万年前よりも昔、十勝平野西部の湿原に日高山脈から大量の礫が流れてきました（光地園礫層）。この礫による扇状地を河川が侵食して4段の古期段丘面がつくられました。

4 万 5 千年前にも日高山脈から礫が流出して扇状地をつくりました（上札内Ⅰ礫層）。その後新旧の礫層が侵食され、4 段の新期段丘面がつくられました。

古い礫層(光地園礫層)
(80 万年前、70 万年前、
40～50 万年前など諸説)

新しい礫層(上札内Ⅰ礫層)
(4 万 5 千年前)

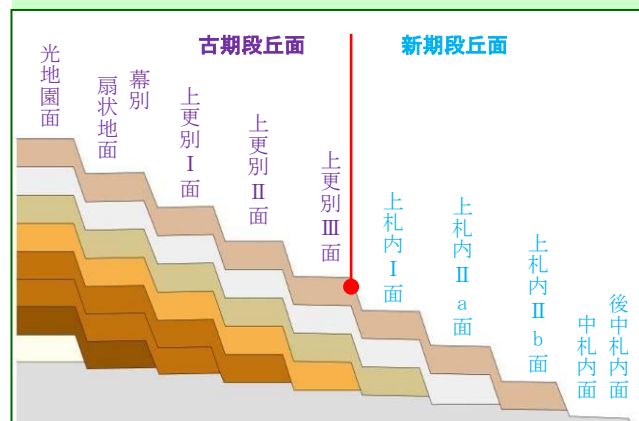


地質図における
光地園礫層

地質図における
上札内Ⅰ礫層

十勝の段丘面

(段丘面の名称は同時期のものでも場所により異なる)



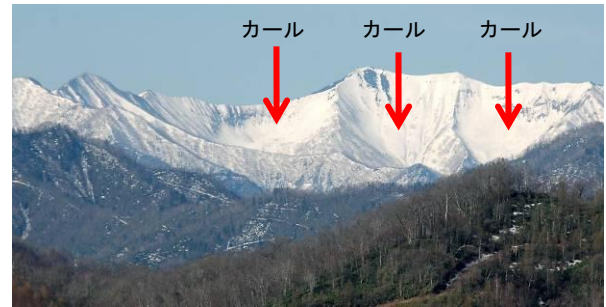
3 図の出典：時をこえて十勝の川を旅しよう！

参考:2012 自然観察会 札内川の勉強会 フィールドワーク

2. 河川の環境

2.1.3 礫の形成と氷期

氷期とは地球の気候が数万年以上の間寒くなる期間のことで、最後の氷期は約1万年前まで続きました。この時期には、大陸の氷床や山地の氷河が大きく広がります。今、日高山脈には、氷河があったときにできた、スプーンでえぐられたようなカール地形が見られます。

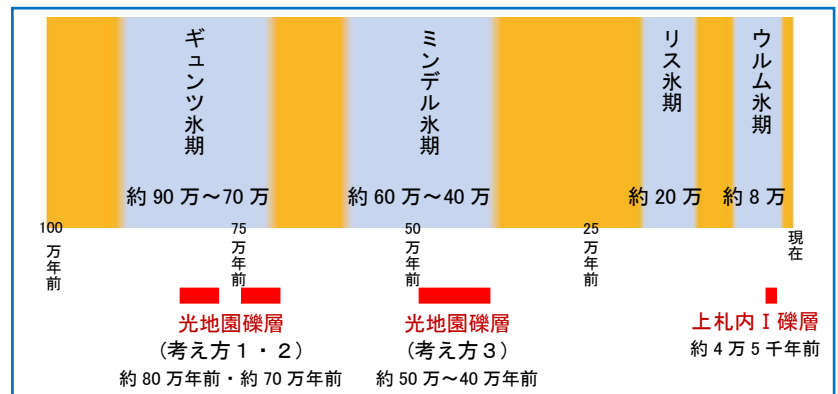


ベテガリ岳のカール地形

礫や石の形成は、山をつくる岩の風化作用によります。日高山脈からの大量の礫の流出につ

いては、その原因については、「日高山脈の上昇によるとする考え」と「寒冷な氷期の風化によるとする考え」があります。氷期説によると、日高山脈は当時、おそらく山麓まで裸地で、気温の変化の影響を直接受け、岩の隙間では水の凍結・融解により風化が進んだのだと考えられています。

参考：2012 自然観察会 札内川の勉強会 フィールドワーク 時をこえて十勝の川を旅しよう！



100 万年前から現在までの氷期と礫層形成の時期

2.1.4 札内川の河原の石

札内川の河原を構成する礫・石は、日高山脈が供給源となります。

主に、ホルンフェルス、片麻岩、閃緑岩、はんれい岩、花崗岩、トーナル岩です。これらは地殻上部の石であり、日高山脈東部には地殻上部が現れていることを示しています。

写真出典・参考：2012 自然観察会 札内川の勉強会 フィールドワーク



ホルンフェルス



かこうがん
花崗岩



せんりよくがん
閃緑岩



へんまがん
片麻岩



トーナル岩



はんれい岩

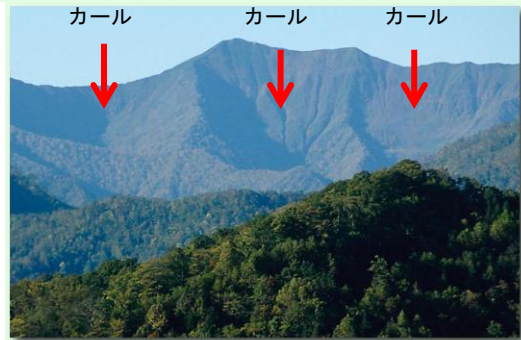
- : 地殻で生じた変成岩
- : 地殻深部起源の火成岩
- : マントル起源の火成岩

コラム ペテガリ岳のカールと一本山展望タワー

日高山脈のペテガリ岳は、歴舟川支流のヤオロマップ川の源流に当たる山です。

その北東斜面には、比較的大きなカールが見られます。このカールは、中札内村新札内南の丘にある「一本山展望タワー」から天気の良い朝に望遠鏡で見ると、はっきりと観察できます。

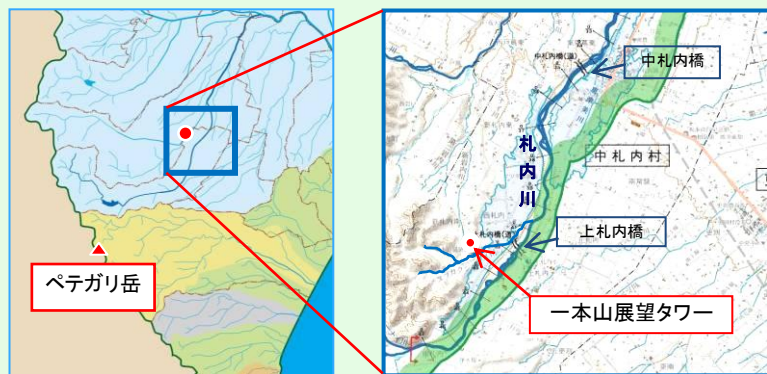
ここは、自然史や地質の専門家や愛好家にとって、全国的に知られた観察ポイントであるといいます。



一本山展望タワーから望遠鏡で見たペテガリ岳のカール地形



一本山展望タワー



2.2 札内川の自然環境

札内川の自然環境を、「河畔林の生物」、「川の中の生物」、「礫河原の生物」に分けて紹介します。

2.2.1 河畔林の生物

【樹木】

河畔林を形成する樹木はその生長の速さから、大きく、先駆性樹種、持続性樹種に分けられます。また、生長して林冠を構成する樹木の他に、林の低層や林縁部等に育つ低木類も見られます。

先駆性樹種の中でもヤナギの仲間は、種子散布量と成長速度が比較的大きいので、洪水などで裸地ができたあと、最初に河畔林を構成する主な樹種となります。その他の先駆性樹種としては、ケヤマハンノキ、シラカンバなどがあり、ヤナギと共に初期の河畔林構成樹種となります。



赤字：重要種（国又は北海道のレッドリスト等記載種）

【林床植物】

河畔林の林床植物には、アイヌ文化期に有用植物として利用されたものも多く、イラクサは食用や糸の原料に、ウバユリはその塊茎が食用に、トリカブトは毒が矢に利用されました。



2. 河川の環境

【営巣する野鳥】

野鳥は、一年中その姿を確認できる留鳥と、繁殖期を中心に姿を確認できる夏鳥、越冬期に姿を確認できる冬鳥、繁殖地と越冬地を行き来する途中に立ち寄る旅鳥に分かれます。

このうち営巣するのは留鳥と夏鳥であり、河畔林で営巣・繁殖する野鳥も多く見られます。



留鳥（周年確認）

赤字：重要種（国又は北海道のレッドリスト等記載種）



アカハラ

アカハラの巣



アオジ

アオジの巣

夏鳥（主に4月～10月に確認）

コラム 河畔林の植物を食草・食樹とするチョウ類

チョウの仲間は、幼虫時代に食べる葉の種類(食草・食樹)が決まっています。河畔林に生育している草や樹木を食草・食樹としているものもあります。

例えば、コムラサキはヤナギ科のヤナギ類を食樹とし、ミドリヒョウモンはスミレの仲間を食草とします。



コムラサキ



食樹



ヤナギ類(オノエヤナギ)



ミドリヒョウモン



食草



スミレ類
(写真はエゾノタチツボスミレ)

参考：日本のチョウ

2. 河川の環境

【生息する哺乳類】

河畔林は哺乳類にとっての生息地であり移動経路となっています。一方で、人の暮らしに被害を与える大型動物などの移動経路になっていることも現実です。



エゾシマリス



エゾリス



エゾシカ



ニホンイイズナ

赤字：重要種（国又は北海道のレッドリスト等記載種）

【生息する両生類・爬虫類】

札内川には、エゾサンショウウオとエゾアカガエルが生息しています。どちらも成体は河畔林から山林の陸域に棲み、産卵は河畔林内などの止水域で行います。幼生は、成体になるまで水域で暮らします。

また、爬虫類としてシマヘビが確認されています。シマヘビは開けた平地から山地、草原、畑、などさまざまな場所で見られ、河畔林にも生息し、ネズミ、小鳥、トカゲ、カエルなどを食べます。



エゾサンショウウオ



エゾアカガエル



シマヘビ

赤字：重要種（国又は北海道のレッドリスト等記載種）

2. 河川の環境

2.2.2 川の中の生物

【生息する魚類・底生動物】

札内川に棲む魚には、ヤマメ(サクラマス)やオショロコマ、ウグイなど淵のある環境によく見られる遊泳魚、ハナカジカやフクドジョウといった石礫の多い環境によく見られる底生魚、緩い流れによく見られるトゲウオ類(イバラトミヨ、イトヨ等)などがあります。

また、水の中には、水生昆虫や貝類などの底生動物も暮らしています。



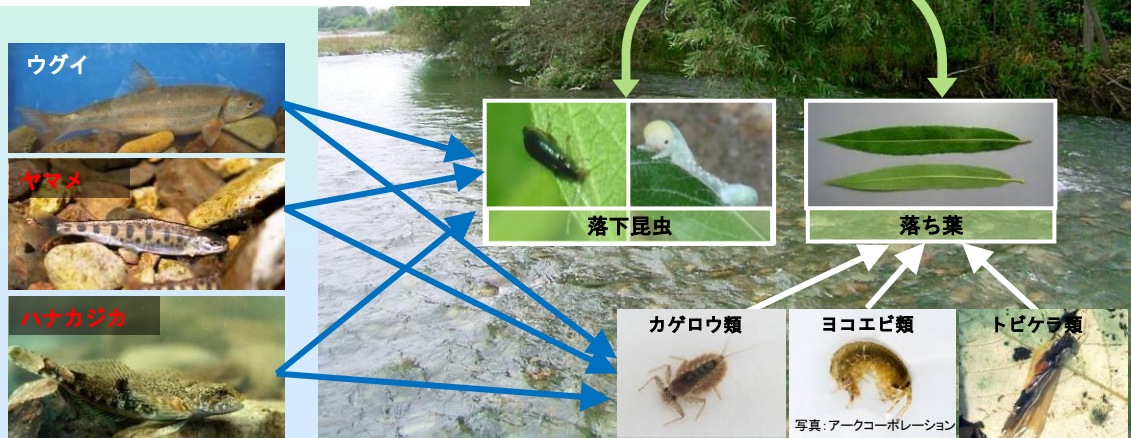
赤字: 重要種 (国又は北海道のレッドリスト等記載種)



コラム 河畔林と川の中のつながり

河畔林は、陸上動植物の生息・生育環境と
なっているだけではありません。

落ち葉は川底に棲む底生動物の餌となり、
樹木から落下する昆虫は魚類の餌となり、
河畔林は河川に生息する水生動物にとっ
ても重要な要素となっています。



2.2.3 礫河原の生物

【植物】

札内川の礫河原に依存する植物として、樹木にはケショウヤナギやドロノキが、また、草にはカワラハハコやカワラナデシコといったものがあります。

重要種でもあるケショウヤナギの種子は綿毛に包まれ飛散し、礫河原に定着して生育します。



綿毛に包まれ飛散する**ケショウヤナギ種子**

礫河原に定着し生育する**ケショウヤナギ**

赤字:重要種(国又は北海道のレッドリスト等記載種)



カワラハハコ



カワラナデシコ

写真:アークコーポレーション(株)

【鳥類】

コチドリやセグロセキレイなど、礫河原で巣をつくり、ヒナを育てる鳥もいます。

また、シギの仲間には、春と秋に礫河原などへ飛来して、水際で餌を採るものもいます。



礫河原で営巣する鳥類



春と秋に礫河原などに飛来し、水際で餌をとるシギ類

写真:アークコーポレーション(株)

赤字:重要種(国又は北海道のレッドリスト等記載種)

コラム 礫河原の生き物たち

石がゴロゴロした礫河原は、一見、生物不毛の世界に見えます。

しかし、ケショウヤナギやコチドリなどのように、新たな命を紡ぐために礫河原を必要としている生き物もいます。

また、同じ礫河原の中でもちょっとした環境の違いで生物の棲み分けがあります。

カワラバッタは石礫の広がるところを生息地にしてしていますが、オクエゾトラカミキリという虫は礫河原に残された流木を主な生息環境にしています。



オクエゾトラカミキリ



写真: アークコーポレーション(株)

カワラバッタ



写真: アークコーポレーション(株)

3 札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア

札内川の望ましい姿

札内川懇談会では、札内川の望ましい姿について、具体的な川づくりや活動をしていくための12のアイディア（ポイント）をまとめました。

3.1 自然環境と治水

- ◆ 日高山脈をバックに広い礫河原を網状に流れる特有な景観
- ◆ ケショウヤナギをはじめ、イカルチドリ、セグロセキレイ、カワラバッタ等の礫河原を更新地とする動植物が生息できる環境
- ◆ 瀬・淵・たまりという河川形状があり、豊かな水生生物が生息し、ヤマメやイワナ、イトウなどが棲める川
- ◆ 十勝川・札内川の連続河畔林（樹林の帯）を保全し緑のネットワークを形成
- ◆ 遡上漁の産卵に適した川や、海と山との間に生態系の連続性がある川を将来像として描き、地域及び関係機関と調整を図る
- ◆ 治水安全を確保して自然と共生するための「地域とのつながり」を継承
- ◆ 川の状況変化に応じた順応的な管理を、地域とともに連携

3.2 教育・体験・文化

- ◆ 日本有数の清流札内川の象徴「水質向上」「ゴミ不法投棄の防止」「川を大事にする文化」を育成
- ◆ 「川狩り」に象徴されるように、流域の住民にとって愛着あるかけがえのない水辺
- ◆ 河原や河畔林を舞台に環境学習や体験活動を実施し、地域を通じて子どもたちが水難事故に遭わないような危機管理の教育

3.2 利用・観光

- ◆ 川のダイナミズムを継承し、ワイルドに川を利用
- ◆ 流域の豊かな観光資源とグリーンツーリズム等の体験型観光と川づくりから地域を発展

3 札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア

3.1 自然環境と治水

- ◆ 日高山脈をバックに広い礫河原を網状に流れる特有な景観
- ◆ ケショウヤナギをはじめ、イカルチドリ、セグロセキレイ、カワラバッタ等の礫河原を更新地とする動植物が生息できる環境

融雪水を活用したダムの放流によって礫河原が更新されれば、札内川特有の景観を維持できるのではないかと期待されています。

また、それにより、礫河原を更新地とするさまざまな生物が生息・生育できる可能性も期待されています。

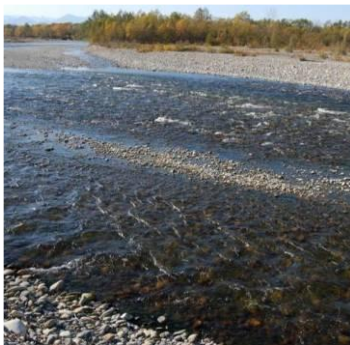


札内川ダムの放流(左写真)と、放流水により更新が見られた礫河原(右写真)

礫河原で生育するケショウヤナギの稚樹

- ◆ 瀬・淵・たまりという河川形状があり、豊かな水生生物が生息し、ヤマメやイワナ、イトウなどが棲める川

ダムの放流によって川底の石礫が移動すれば、多様な河川形状が出現するのではないかと期待されています。



ダムの放流によって期待される、瀬・淵・たまりのある多様な河川形状



ヤマメ

3 札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア

- ◆ 十勝川・札内川の連続河畔林（樹林の帯）を保全し緑のネットワークを形成

- ◆ 治水安全を確保して自然と共生するための「地域とのつながり」を継承

堤防沿いに林を育成し、堤防を越えるような洪水時に水の勢いを抑えようというのが治水の杜づくりです。

この治水の杜づくりにおいて、地域住民による種とり、育苗、植樹を実施し、地域の方々と一体となって川づくりを行い連続した河畔林を形成させ、十勝川から札内川への連続した緑のネットワークづくりが期待されています。



地域の小学生らによる治水の杜植樹会の様子



植樹後数年経った治水の杜の様子

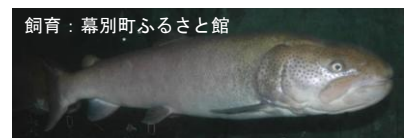
- ◆ 遡上魚の産卵に適した川や、海と山との間に生態系の連続性がある川を、将来像として描き、地域及び関係機関と調整を図る

十勝川中流部の千代田新水路分流堰には、堰横魚道（階段式魚道）と高水敷魚道（水路式魚道）が設置されています。

このような取り組みにより、遡上魚類が十勝川下流から上流部、そして札内川にも遡上できるようになることで、海と山との間に生態系の連続性ができていくのではないかと期待されています。



千代田分流堰の堰横魚道をのぼるサケ



飼育：幕別町ふるさと館



写真：アークコーポレーション(株)

遡上魚であるイトウ(上)とサクラマス(下)

- ◆ 川の状況変化に応じた順応的な管理を、地域とともに連携

意見交換や現地見学を継続的に行うことが期待されています。

また、調査や管理に関しても、地域住民も分担して実施していくことで、よりきめ細やかな河川環境の把握が可能となり、よりよい川づくりができていくのではないかと期待されています。



住民による簡易水質調査

3 札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア

3.2 教育・体験・文化

- ◆ 日本有数の清流札内川の象徴「水質向上」「ゴミ不法投棄の防止」「川を大事にする文化」を育成

「清流札内川」をこれからも維持し、向上させていくためには、地域住民を中心に、体験学習や環境学習を通じて札内川のことを理解していく必要があります。また、そうした学習の場を広げていくためには、学校・地域における指導者の育成も大切です。

さらに、川に関わる地域での活動を進めていくことで、新たな河川文化が生まれ、川を大事にする文化へとつなげていきます。



住民参加による河川清掃
(クリーンウォークとかち in 札内川)



体験学習での水質調査



地域住民活動による、流木利用の花壇づくり

- ◆ 「川狩り」に象徴されるように、流域の住民にとって愛着あるかけがえのない水辺

かつて「川狩り」が行われていたときのように、流域の住民にとって愛着のある川とするためには、堤防から川までよく見通せて、安全にかつ気軽に水辺まで近寄ることができることも大切だと考えます。

また、ダムの放流によって遠浅の水辺ができることに、より近づきたくなる川への期待を込めます。



かつて十勝で盛んだったという
「川狩り」



見通しがよく、アクセスのよい川
への期待



近づきやすい遠浅の水辺

- ◆ 河原や河畔林を舞台に環境学習や体験活動を実施し、地域を通じて子どもたちが水難事故に遭わないような危機管理の教育

川での事故を防ぐためには、正しい知識と体験による深い河川理解が必要です。そのためには、体験学習・環境学習の実施が必要であり、また、学校教育や地域教育における指導者の養成が大変重要になります。

また、安全な体験活動を行うための遠浅の水辺ができることにより、学習の場ができることを期待します。



体験活動による安全教育

3 札内川の望ましい姿とそれに向けたアイディア

3.3 利用・観光

◆ 川のダイナミズムを継承し、ワイルドに川を利用

札内川沿いに自転車道のネットワークができれば、川が十勝をつないで新たな利用形態が誕生し、十勝全体の活性化につながる可能性があります。また、川の流れを利用した川下りやカヌー体験、あるいは釣りなどのアウトドア体験は、札内川の魅力をさらに感じさせてくれることでしょう。

地域と一体となった整備には「かわまちづくり制度」などの活用も考えられます。



堤防を利用した自転車ロードレース



カヌーレース札内川大会



フライフィッシングを楽しむ

◆ 流域の豊かな観光資源とグリーンツーリズム等の体験型観光と川づくりから地域を発展

流域にある豊かな観光資源を活用し、川の体験と組み合わせることで体験・滞在型観光を推進できれば、十勝の観光・経済の発展に寄与できる可能性があります。

そのためにも、対象を限定せず、さまざまな観点からアイディアを出し合い、結びつけていくことが重要です。

また、河畔林を上手に整備しながら育てていくことで、自然豊かで人にとってもやさしい川づくりが可能となります。利用者への案内看板に十勝の樹木を利用するなど、ここにも川と人との結びつきを高める可能性があります。



写真：中札内村
友好都市との交流（中札内村と川越市）
カヌー体験・札内川一号砂防えん堤



写真：白鳥まつり
鞍馬の馬とそりによるアトラクション



写真：幕別町
パークゴルフ場（幕別町・札内川河川敷）